

< 小田原市自治基本条例検討委員会 会議録 >

会議名	平成 21 年度第 2 回小田原市自治基本条例検討委員会	
日時	平成 21 年 9 月 18 日（金）19 時～21 時 00 分	
場所	小田原市役所 大会議室	
議題	1 市長あいさつ 2 第 1 回オープンスクエア（小田原のまちをつくっていくのは誰だろう？）の成果をもとに話し合い 3 第 2 回オープンスクエアに向けた検討 4 その他	
資料	<ul style="list-style-type: none"> ・次第 ・資料 1：第 1 回オープンスクエアの成果 ・資料 2：日程（案） ・森谷委員からの提供資料 	
出席者	委員会	松下委員長、池田委員、片野委員、金井委員、木下委員、椎野委員、高松委員、野坂委員、森谷委員、（欠席 廣井副委員長、瀬戸委員） 今井ファシリテータ
	事務局（市）	加藤市長（挨拶のみ） 【行政改革推進課】時田企画部次長、田中課長、豊田課長補佐、石井担当主査 【地域政策課】諸星課長、府川担当主査、高橋主査【総務課】二見主任
傍聴者	7 人	

1. 市長あいさつ

⇒ あいさつ（市長の自治基本条例に対する想い）

自治基本条例は、私がかねてから標榜している「市民の力を活かす市政」、「市民が主体となった小田原」を目指していく上でのまさに骨組み、基本原則となるものであり、市民の皆さんとの協働なくしてこれからの地域運営は立ち行かないという非常に厳しい現実認識をもっている。この条例の骨子をまとめていただく重要な役割をお願いする皆さんに、自治基本条例についての私の思いを伝えさせていただく。

小田原における自治基本条例は、「持続可能な市民自治のまち」をつくるための基本的なルールになるものである。これからの市政運営の役割分担を決めるものであり、進め方のルールを分かり易く、できるだけ平易に定めていくものである。

市民と議会と行政が果たすべき役割をそれぞれ明らかにする。まちづくりは、特に公共の分野は行政の仕事ということで行政が担ってきた。市民の皆さんの、公のことは市役所がやる、何をしてくれるのという意識構造がこれまでの日本の地域の主流だった。これを切り替えなければいけない。お互いの立場を尊重しあい、また、お互いの役割をお互いが意識しあい、松下先生が言うところの「野球は 9 人でやりましょう」というチームプレイを基本条例の中で謳い上げていかなければいけない。まちづくりを進めていく指針ということが言える。

何よりも大事なことは、これから私たちがどういった小田原の姿を目指していくのか、具体的なまちの形というより、どういうまちの仕組みとか、まちづくりの文化とかルールとか小田原らしいまちづくりのスタイルとか、そういったものをどうやって作っていくのか、我々の中でのイメージの共有が重要な作業だと思う。まず、そこを検討委員会やオープンスクエアの場を通じてできるだけ市民の皆さんに具体的なまちづくりの様子などを思い浮かべながら議論していただくことが大事だと思う。

地域が自立をして活動して活気付いていくための取組、これを今地域コミュニティ検討委員会などいろいろなところで議論している。また、現在様々な検討委員会を立ち上げて議論をお願いしているが、これは、どうやってみんなが参加して身近な課題を解決していこうかということをも最重要と考えているからであり、まさにそれに横串を通すのが自治基本条例にほかならないと思っている。

そういった意味でも、小田原ならではのまちづくりのスタイル、根ざしていくべき地域運営の姿、共に支えあう地域の姿、そういったものを思い浮かべながら具体的に条例に文言として盛り込んでいただきたい。

また、何年かに一度は、やはり自治体の状況や社会の情勢も変わるので、一定のスパンで見直しをかけながら、10年、20年に亘って育てていく条例になると思う。ぜひ、先のことも思いを馳せながら検討していただきたい。

その成果が分からなければやる気にならないという意識構造自体を変えていく必要があり、共に動いていく、共にこのまちを作っていくということ自体が、我々がこの条例で目指す成果であり、そういう文化を創造する、そういう地域の気風を作っていく、それを検討作業を通じて伝えてほしい。

そのために、どうやって市民の皆さんを議論の場に引っ張り込んでいくか、或いはそういう思いに火を付けていくかという条文の策定に当たりぜひ皆さんに考えていただきたい。

オープンスクエアという枠を超えて、よりたくさんの方に今こういった作業をしていますよといった説明をする場が必要になると思う。いずれにしてもそういった中で皆さんの関心を巻き込み、また一方で、条例化に向けて議論の集約をしていかなければいけないということで、皆さんには大変な役割を担っていただくが、そういったことも含めてお願いしたいと思う。

そんなプロセスを経てできあがってくるものは、10年20年形を変えながら、「持続可能なまち小田原」の骨格を作っていくものであり、大変にやりがいのある取組だと思っていただければありがたい。

本当の意味で市民の皆さんにこの条例の真価が伝わるのは恐らく数年後になるのかもしれないが、そういうことも含めてよろしく願います。

最後に、改めて、ニセコ町や大和市の条文を読み返してみると、条文の主語が、私たち市民、私たち町民は、私たち検討委員は、職員はということではなく、一人ひとりの市民の皆さんが、自分の言葉で口をついていえるようなものでないといけない、そういう視点でなければいけないということを私自身、確認し、肝に銘じて進めていきたい。これまでのように、職員が、小田原市が主導して自分で舞台を作って、自分で説明するということでは、この条例は全く生きてこない。やはり、すべてのことを一緒にやりながら、一緒にこしらえて、一緒に説明して、一緒に作業していくものと思っているので、よろしく願いたい。

2. 第1回オープンスクエアの成果をもとに話し合い

⇒ 第1回オープンスクエアに参加した委員から、各班ごとの話し合い状況を報告。

(今井ファシリテータ)

第1回オープンスクエア、第1回検討委員会で「小田原のまちをつくっていくのは誰」と決まり、オープンスクエアで自由闊達な議論、そしてそれを受けて検討委員会という、今回で1クール目が終わる。1クールの流れの形を作り、一廻りひとまわりの成果をあげていきたい。

まず、第1回のオープンスクエアに参加した委員さんから報告していただき、情報の共有をした。まちをつくっていくのはどういう人達か。市民はどういう人達か、どういう役割、権利、責任まで展開しながら、担い手についての議論の成果をあげていきたい。

【1班】
木下委員

- ・市民（行政・議会関係者たくさんの団体も含めて）として、より多くの人にオープンスクエアに参加して欲しいという視点で話しあった。
- ・お寺が多い、作家が多いというまちの特色がある。文化的情報を得たい。
- ・小田原市は小田急など交通も便利。市外の方にもぜひ参加して情報を提供して欲しい。

【1班】
池田委員

- ・お祭りなどのイベントをしてはどうかという話もあった。
- ・農業の実態について話を聴いた。後継者不足、地産地消の推奨も小田原らしさにつながると感じた。
- ・市民の責任についても話をしたかったが、できなかった。
- ・役割という視点で書いた。

【2班】
椎野委員

- ・子供会、自治会などの加入者が少なくなっている。
- ・市民が「こんなふうになりたい」と思っても、行政との関係で止まってしまうことが多い。行政は力が大きいので、行政側もそのことを理解してほしい。
- ・市民の中から人材発掘を。どう引っぱり出し、活用するか？地域での掘り起こしを。
- ・面白かったのは、一次産業に関する人が多く出されたこと。良い視点だと思う。
- ・市外の人もみんな取り込んで、すばらしい小田原をつくってもらおう。

【2班】
片野委員

- ・テーマについて話し合う前に、自治基本条例ができたならどうなるかという質問をされた方がいて、大半の時間を使った。しかし、却って自治基本条例への理解は深まったと思う。
- ・議員・行政がリーダーに。
- ・行政と地域の間にあるもの。消防など。
- ・通勤・通学者、観光客も含めて、小田原への思いがある人
- ・将来の担い手（子供）
- ・行政や市外、地域で「つながり」を見出していけたらいい条例になる。

【3班】
金井委員

- ・「行政・議会」「団体」「市民」の3つに分けた。
- ・団体でも、自治会などの既存の団体は、市に意見を言いやすいが、子供、高齢者、外国人など、市民のサイレント・マジョリティーも含めた声の小さな人たちの声も取り入れなければ。
- ・家の前の掃除は、昔はみんな自分でやっていたが、今は行政の仕事になっている。人のつながりが薄くなっているのではないか。

【3班】
高松委員

- ・声の届かない方々から意見を吸収し、よりよい小田原を作っていくことが大事。年金生活者や子供やフリーターなどもまちの担い手。

【4班】
森谷委員

- ・抽象的－具体的という軸で考えた。
- ・地縁、子供、市民でない人。
- ・これからのまちづくりで足りないものは、有能なコーディネーター（つなぎ手）例えば、消費者と農業者と商業者をつなぐ団体。
- ・趣味の団体、問題別の団体
- ・みんな触れたがらないが大事な担い手…議員の後援会、外国人団体、宗教関係
- ・組織は、すでに把握できているはずなので、リストアップしておけば、同じことの繰り返しの話し合いにならない。

○ 担い手（個人と団体）

（松下委員長）

担い手の議論をまとめると、【個人】としてのくくりと、【団体】というくくりで市民が分かれています。担い手といっても、行政や議会があまりなく、市民を中心に考えている点も特徴的。また、団体のくくりは、ボランティア団体や地域団体、事業者団体、などに分けられている。まず、【個人】を役割との絡みで考える。どういう役割、どういう責任を負うのか。市民で言うと段階がある、まず一番の基本は、

- ①小田原に住んで選挙権という権利を持つ市民。核になる市民。これが市民のベース。
- ②このまちに住んでない、住民登録はしていないけど市内で活動している市民。働いていたり、学生として通っているなどの市民。このまちに選挙権のない市民。
- ③外国人は、登録はしているが選挙権がない。選挙権はないけど暮らしている市民。
- ④観光客などここを通る人達も担い手としている。（小田原らしい意見である）

市民を大きく分けるとこの4つになるが、実は、市民の中に、更に未成年者、子どももいる。それぞれ役割が同じか、期待することが同じか。役割や期待で整理できる。

外国人などは議論が分かれるので役割で考えたい。

団体は、地域を基盤とする団体とボランティア団体のような特定の目的ある団体。目的が違うことによって役割や期待されることが違う。その辺を分けて考えて条例にどう載せるか。「こういうことが期待されている」というような整理をしていきたい。

まず、個人の役割、すべきこと（責務）を議論したい。何を期待するか。

他市の条例では、このあたりの議論があいまいにされているようだ。市民の心意気やすべきことが違うように感じるが、あいまいにまちづくりを一緒にやりましょうよというだけになっている。

森谷委員

今回のオープンスクエアでは、毎回出ている議論に、ただ、今どんな団体があるかを書き出したに過ぎなかった。これから、誰が担っていくかがない。根本となる魂が見つけれなかった。例えば、ある田舎の自治会長が、行政が何も助けてくれないから何もかも自分達でやるしかないといって活動している。そういう魂を掘り返す必要がある。特に問題別に集まった人達は、何か問題があり集まっているので気持ちが強い。今後集まらなければいけない問題を考えるのがいいと思う。

野坂委員

担い手は、ほとんど網羅されていると思う。
条例づくりに多くの方に参加していただくには、条例づくりの前後で、「何が変わるのか」ということを提示できたらいいのではないかと。

椎野委員

市民の中の魂の掘り起こしは大事。魂を掘り起こすためには、個人の役割と「自分は小田原のために何がしたいのか」という思いが重なりあって魂が生まれる。環境、福祉、教育など、分野は違っても、思いが同じ人が一緒に活動して、「私たちで変えてみよう」、「作り上げてみよう」というのが市民活動団体だと思う。市民活動は、大きく小田原を変えようと小田原の魂としてうねりを持って活動しているので、市民活動を人材の発掘とつなぎ合わせたら、素晴らしい小田原になるものと思う。

松下委員長

魂のよりどころの一つとして、目的を持って活動している人たちをどんどん活動する場面や仕組みを作るとのこと。

高松委員

早急な成果は求められないのがこの条例。憲法のように前文を作り目的を共有したい。憲法ができたときに、憲法の成果はという議論があったと思うが、憲法によりいろいろな法令ができた。
目先の成果を考えるのではなく、この条文を通じて、市民も団体も行政もどれだけ意識が変わり協働作業ができるかどうかを大事に考えたい。

松下委員長	<p>この条例の目的は、この条例を作ることにより、どのようなまちを目指すかが語られている。市民自身の燃えるもの、やろうという気持ちを大切にしながら、掘り起こしていくことがこの条例の目的だと思う。</p> <p>私は、この条例を作ると誇りと責任の溢れたまちになっていくという一歩になると思う。そういう議論になればいい。</p>
森谷委員	<p>自治基本条例は、ドイツの大陸法の上から下へから英米法の下から上へに変わっていくものだと感じた。この条例こそ実効的なものでなければならず、今ある問題を解決するにはどうしたらいいかを順番に考えて、その一つの段階として自治基本条例がある。実は、もう各検討委員会では難問を抱えている。それを解決するために自治基本条例が極めて有効で、作る前に効果のあるべきものだと思っている。</p>
高松委員	<p>確かに、いろいろな検討をしているが、検討の前にあるものが自治基本条例で、そのことを市民一人ひとりに知らせることが大事な使命だと思う。</p> <p>共同作業などの現場の状況を洗い出すのも大切で、それを解決するための根本がここにある。</p> <p>市長の懇談会は参加しやすいが、「これからのゴミはどうする」「市民活動はどうする」といった具体的な内容では、人が集まらない。問題意識を持たせるような自治基本条例が必要だと思う。</p>
木下委員	<p>私自身は、今まで仕事などに忙しく、あまり人との関わりを感じずに生活してきた。恐らく多くの方も同様だと思うが、そういう方々に条例に、まちづくりに、小田原市に思いを持ってもらうことが意義だと思う。自分も、参加してみても、何が出来るかを考えるようになり、地域の見方が変わり、人との関り方が変わってきた。そうすると、地域愛や郷土愛が生まれ、人に親切にしようという気持ちになる。小田原を愛する意識の变革が一番の価値だと思う。だからオープンスクエアへの参加を増やしていきたい。</p>
金井委員	<p>個人や団体が、現在でも小田原市のために動いている。ただ、ばらばらの感がある。信頼ある行政から、どんどん活動して下さいと示されると活動しやすくなるし、迷っている人も参加しやすくなる。</p> <p>最終目標として、「50年100年先に小田原が住みたい場所全国一位」になるような条例ができればと思う。</p>
松下委員長	<p>つなぎ手、コーディネーターというのは、大事な視点だと思う。市民同士、市民と議会、市民と行政などの関係からつなぎを考えると、この条例を生かす意味で面白いと思う。</p>
池田委員	<p>今の小田原に問題意識を持っている人が、オープンスクエアに参加すれば、具体的な問題点や改善点が挙げられる。参加していただくためには、小田原市の実態や改善点について話し合うのも大事だと感じた。</p>
松下委員長	<p>不満や問題意識を持っている人が、しっかりとした議論になる仕組み、文句だけでなく、問題提起が改善が変わっていくという仕組みが大切。それは、なかなかないことなので特徴になる。</p>
片野委員	<p>市民、個人、団体と問題別を整理してみると、問題別は、環境とか教育とか問題を挙げて、そこに担い手となれる人を、団体や個人で集めること。それぞれの分野間での隔たりを埋める人という理解でいいか。</p>

森谷委員

(携帯した資料を配布)

例えば、具体的にまちの自治、雑草があつて困るという話がある。個人の家の前などはきれい。雑草のあるのは、公有地や事業者の土地であり、清掃一つとっても抜けてしまう土地が生まれている。そういう部分を埋める役が必要。

○担い手 (子ども)

松下委員長

担い手を中心にどんなまちをどんな仕組みで作ればいいのか。
子どもについてはどうか。

どこのまちでも、「子どもがまちに参加してもらうようにしよう。」「子どもの権利や参加のしくみを考えよう。」と、敢えて子どもを議論している。

野坂委員

子どもは頭が柔らかいから、すごい発想がある。できる限りまちづくりに参加させるしくみを作りたい。

椎野委員

子どもが郷土を愛するために一番身近なのは学校教育だと思う。先生がいかに郷土愛を育てながら子どもを育てるかがポイント。今、共働きの多く、学童保育の需要が高まっている。しかし、安全性のことばかり考えているが、その3時間4時間の中でも、子どもたちが自分らしくという小さな声を引き出してあげるのも大事かと思う。

金井委員

自治会の加入率が下がっている。活動者が減っているわけは何か。子どもの頃に地域に関っていなかったのではないか。子どものころにお祭りなどに関っていると地域に戻りやすい。逆に経験をしていないと、大人になって地域に戻ってきて自治会に入れといてもなかなか入りにくい。子どもたちから、地域に関っていけばまちづくりに関わる意識ができる。

木下委員

子どもは大きな担い手で、地域の教育力は大切。

子どもたちが参加する機会を作ったらどうか。例えば「理想のまち小田原」などのテーマで作文や絵を募集したらどうか。親にも伝わる。

教育現場に「小田原らしさ」を導入することは難しいと思うが、郷土の偉人(二宮尊徳などを)を学ぶ機会を教育に位置づけられたらいいと思う。

森谷委員

子どもの権利条約の精神を忘れてはいけない。大人からに対して、子どもの意見を表明する権利がある。それを尊重することは必要で、子どもを守るためには意見表明権を強く保障することが必要である。

池田委員

大学生では、よほどまちづくりに興味がなければ、オープンスクエアなどにも参加しない。多くの子どもの意見をきくのならば、オープンスクエアを学校でやったらどうか。難しいなら、アンケートを学校に配ってもらい子どもの意見を集めたらどうか。

○担い手 (外国人)

松下委員長

子どもの意見を聞くことも大事。この条例づくりでは、子どもがまちのことに関心を持つようにしていく仕組みを考えながら、条例に子供を位置づけるかどうかの議論となる。内容の幅は次の段階での議論でいいかと思う。「子どももきちんと取り上げましょう」ということを今は共有しておく。

次は、外国人。地方自治法の住民には外国人が入っている。

外国人の地域との関わりは難しい。このまちに住んでいるのだから、「一緒にまちづくりをしよう」という議論か、「そのままそっとしておこう」という議論になるかと思う。

椎野委員	サポートセンターでの話だが、最近外国人の方が4人の子どもを呼び寄せた。しかし、仕事がなくなり日本語を話す機会が減ってしまった。そこで、雇用主の家族が、外国人の子どもたちをサポートセンターに連れてきて、子どもたちが自立できるような働きかけをしていた。雇用主が地域の中でがんばっている姿。外国人自身が、活動する場所に来て仲間を作りながら勉強している姿がある。自治体が支援するのではなく、自分達で努力している姿があり、これを小田原の中でどうもっていったらいいのか。
松下委員長	市民が外国人をサポートする文化を大事にしようという話だと思う。

○担い手（観光客）

松下委員長	観光客の話もしてみたい。観光客は通りすがりの人なので、まちづくりへの参加は難しい。関心を持っていただくことに関しては、異論はないか。
高松委員	まちをつくるうえでは、観光客の視点も大事かと思う。湯布院などは、町の観光関係者が、観光客の声を聞き、それをいかに生かすかを考えている。一人で来た旅行客に、一緒に語り合っって意見を引き出すこともしているらしい。小田原もそういうことに挑戦するようになってほしいと思う。
金井委員	生活者レベルで考えると難しいが、駅前からの観光ルートは、車がたくさん走っている。その中をお城まで歩く。もし、車がなく、歩きやすい街になれば、観光客にとっての小田原の印象が変わると思う。観光客に対する気持ちのような部分を理念的なところに盛り込めたら、いいグランドデザインができるかと思う。
椎野委員	小田原検定というのがあり、1級をとられるのは市外の方が多い。市外の方のほうが、小田原の魅力を発見している。そんな方たちから、意見を引きだして、その意見を活用できる仕組みがあるといい。
松下委員長	観光客に対するもてなしの気持ちは、いいまちになるきっかけ。小田原好きがたくさん来られると価値が上がり、いいまちづくりのヒントになる。 “よそ者”の観光客の意見を生かしていきましょうということになる。
今井ファシリテータ	子ども、外国人、観光客という担い手そのもの話よりも、担い手と担い手の間をどう繋ぐか。担い手をどう掘り出して活躍していただくかという議論の方が、皆さんは大事だと感じていることが分かった。担い手そのものよりも、条例の目的などに繋がっていくものでいい議論だと思う。 この条例の話は多岐にわたっており、この議論を発展させるよりも、いろいろな核となるテーマで一通りの議論をする必要がある。ポイントは絞るが、今回は、第1クールの議論として成果を出していただきたい。
松下委員長	目的の議論から柱が出てきたので、整理して提言作りに活かせるものを探していく。

3. 第2回オープンスクエアにむけた検討

○次回のオープンスクエアの進め方

森谷委員	オープンスクエアでは、TRYフォーラムのように最初に話をしていただく方法はどうか。また、団体組織からの意見集約をすることはどうか。他の検討委員会から意見を求められないか。オープンスクエアの名前を検討できないか。 具体的には、最初に説明者、テーマに関心がある人、関わっている方から意見を言っていただくことで、テーマの論点をはっきりしてくる。議論がリードさ
------	---

れこともあるので、取り入れられないか。
また、団体へは、書式を作りアンケートを取ったらどうか。これをする事で、担い手の話が有意義になる。

今井ファシリテータ この条例の議論の中で、そういう方法を取ることもある。プレ検討委員会の際にも、松下や私からミニ講演をした。話題提供をして、より議論を盛り上げることはよくある手法。アンケートは何を聞くかが大事なので検討する必要がある。

松下委員長 オープンスクエアの進め方はいろいろな方法を取り入れ、小田原にふさわしいやり方を作っていく。

片野委員 「オープンスクエア」という名称について、日本語だと堅苦しいと感じていたが、かっこ書き（サブタイトル）を日本語でつけたらどうか。

○2 回目のテーマについて

高松委員 オープンスクエアに人を集めることが大事だと感じていて、小田原市を良くするイベントや事業は、どのようなものをすれば良いですか？」など、お祭りのような催しのアイデアについて、オープンスクエアで募ってはどうか。

森谷委員 問題から出発すべきで、「今、一番困っていることは何ですか？その解決のためには、どんなルールが必要ですか？」はどうか。

椎野委員 「一番困っていることは何」はいいと思う。オープンスクエアの意味は、市民としての思いはあるが、意見の言えない方の意見を言ってもらって雰囲気作りが大事。大きな声も大事だが、小さな声を忘れずにしたい。両方の声を大事にすることを考えないといけない。

高松委員 「一番困っていること」だけでは、個人的なことなども出てきそう。その前に何か入れたい。例えば、「今、市民として一番困っていること」など。

○ 広報戦略について

森谷委員 広報戦略が必要だと思う。

松下委員長 なるべく数回先まで早めにテーマを設定しておきたい。

今井ファシリテータ 次回検討委員会の議題としたい。

○検討委員会の進め方

片野委員 前回、担い手をやわらかいテーマで考えたが、結局出たものは、プレ検討委員会と変わらなかった。できれば、検討委員会をまとめる会とオープンスクエアに向かう会の 2 回に分けて実施できないか。オープンスクエアの数を減らしてもしっかりと準備をした方がいいのではないか。

先ほども、個人、団体、問題別、を考えている間に話が進んでしまったが、意見の集約ができていないと思っている。ある程度集約した方がいいのではないか。

今井ファシリテータ まだ、集約は難しいと思う。まだ先があり、今、足元を固める部分であるので、また後戻りすることもあると思う。が、一通りの話を早くしたい。

○オープンスクエアの関わりについて。

今井ファシリ テータ	オープンスクエアの中での委員の関わりについて確認したい。 本来は、前回話し合うべきだったが、オープンスクエアに参加する人の確認や、検討委員会の報告、テーマの説明などの役割、グループの中でどのようにふるまうかなど。
木下委員	当面は、自由な参加でよいのではないか
松下委員長	オープンでは当番制にするとして、きっちり役割を決めるか自由にするかだが、今は、自由度を持たせながら進めてみることにする。

○第3回以降の日程について

事務局	前回のアンケートによれば、平日の方が集まりやすいという意見が多かった。 そこで、平日夜と土日の昼の組み合わせとした。
金井委員	前回のように一般参加の方が少なくてはいけない。できるだけ人を集めなければ。行政としての対策は？
事務局	団体への呼びかけを強化。プレの意見を反映させながら呼びかけていく。会場として、市役所以外の集まりやすい場所も考える。
松下委員長	日程はこれでいいのではないか。 試行錯誤で進めているので、進め方についても、これからもどんどんご意見をいただきたい。